

「自然の中では子どもが私の先生です」

岐阜聖徳学園大学短期大学部
齋藤 正人



季節感が感じられないキャンパス

「葉っぱが落ちる前に終わらせよう」これは教室の外から聞こえてきた声です。本学では、植栽管理を造園業者に委託しています。初夏には消毒と除草。そして秋には伐採かと思うくらい大胆な剪定。紅葉や木の実を愛でる種類でさえ、色づく前に剪定されてしまいます。そのため、キャンパス内の樹木は緑色の印象しかありません。

私の授業では、季節（秋）の自然素材を用いる課題があります。この課題との関係もあり、事務に剪定時期を遅らせてほしいと申し入れると、「清掃員の落ち葉の掃除が大変だ。年間計画で決まっている」など、取り合ってはもらえません。誰のための環境整備なのかと疑問に感じてしまいます。また別のケースでは、隣接する付属高校に銀杏の葉を拾いに行った学生が、「立ち入り禁止だ」と追い出されたことがあります。

このようにルールやマニュアルに縛られて、学生の周りには季節感を感じられない教育環境があります。岐阜は比較的自然に囲まれた地域性にありますが、キャンパス内は極めて不自然な自然環境と言えるでしょう。



図：学生の課題

授業課題と学外実習とを関連させることによる相乗効果

10月中旬に自然素材で表現する課題を行っています。身近な自然を観察し、その季節ならではの素材を集めることから始めます。素材を探しながら、普段は気づかなかった自然の美しさや不思議さを感じたり、季節の移ろいやおもしろさを発見したりすることがねらいです。その感じたことや見つけたものから、イメージを膨らませて季節（秋）を形や色であらわす課題です。

学生と話していると、生活の中で自然を意識している人は少ないと感じます。さらに、美しいものばかりに惹かれるという均一化された価値観を共有しています。このような状態では、一律に「きれいなもの。かわいいもの」をつくることが必至です。そこで、実際に子どもが自然と関わる姿を知る必要があると考え、実習期間に合わせて課題の授業回を調整しています。1回目は、自然素材を活動に取り入れる意義や目的、自然素材の特徴やその扱い方などを説明します。その翌週から2週間の教育実習（幼稚園）をはさみます。そして、実習後に2回目の制作とレポート提出を行っています。

課題の事前学修に「子どもが自然と関わる姿を観察すること」があるため、実習では積極的に自然を取り入れた活動を実践しているようです。しかし、実習巡回の際に見られるのは、子どもから提案されたあそびを、一緒になって楽しむ学生の姿です。子どもに付いてまわり、色づいた葉をグラデーションにしたり、バッタの飛び方を真似したりしています。また、幼少期の葉っぱを使ったあそびや昆虫の持ち方などを思い出し、子どもと同じ目線であそぶ様子があります。

学生は、自然の楽しみ方を子どもから教わり、これまで気に留めなかったようなものに興味を持つようになります。そして、授業においても目線を低くして自然観察ができるようになります。「きれいなもの」に惹かれていた実習前とは明らかな違いです。このようなことから、課題と実習とを関連させることによる相乗効果が期待できると言えるでしょう。



図：学生の課題

自然をあそびの道具とする子どもたち

実習を終えた学生は、子どもから刺激を受けて大学に戻ってきます。大半の学生は、子どもが自然の中であそんでいると感じたようです。例えば「菓子箱に木の実を集めて宝箱をつくっていた」「大きな葉に穴をあけて顔に見立てていた」など、自然素材があそびの道具になっていたと話します。学生には当たり前前のもので、子どもにとっては宝物になったりおもちゃになったり、その素材自体に意味を見出し

ていることに気づいたようです。

また、子どもが自然素材を様々な方法で試す（実験のような）行為も、五感を働かせて季節を感じることに繋がっていると気づいたようです。例えば「花や実をつぶして薬づくりをしていた」「金木犀を集めて香りのコレクションをしていた」など、手の感触や鼻で嗅いだ匂いからも季節を感じていたと話します。他の学生も「葉の種類で並べていると思ったが、手触りの違いで分類していた」とその場面を振り返ります。この学生は視覚のみで判断していたため、触覚を使った自然への関わり方に驚いたようです。その後、五感を働かせて自然を感じる「見方」ができるようになりました。

このような自然と関わるプロセスを間近に観察した学生は、「自然の中では子どもが私の先生です」とレポートに書いています。この言葉の共有が、学生を固定観念から解放する糸口となることを期待します。



図：学生の課題

子どもの表現には物語がある

前述した「木の実を集めた宝箱」をつかった子どもが、「鳥にはこの宝箱がごちそうに見えるよ」と言ったそうです。「鳥の目（気持ち）になって、鳥が好きそうな木の実を選んで」と話します。さらに、鳥の家族構成を話したり、鳥のお弁当を考えたりしていたそうです。物語をつくって楽しんでいることに気づいた学生は、子ども特有の世界を体験することができたと嬉しそうに話します。

実習後の美術室でも「蟻の目になってみよう」と、友だちとの物語づくりに発展しました。「蟻の家は迷路だらけだろう」「蟻さん家マップが必要だ」「真っ暗だから電球をつくろう」など、その物語とともに

に表現の幅も広がっていきました。

このように、自然の中でのあそび体験は、諸感覚を磨き、感性を育み、想像力を豊かにしていきます。そして、自分の中に膨らんだ物語（イメージしたこと）を具現化することによって、子どもは自己表現への満足感や達成感を得ているのでしょう。

季節を全身で表現する

子どもは、自然を見て判断するだけでなく、触れることによって質感や重さを確かめようとします。また、叩いて音をきいたり匂いを嗅いだりして確かめようとします。時には、目に見えない風や手で触れることのできない光までも、諸感覚を働かせてその実体を探ろうとします。この全身を使った直接的な体験を通して、対象となる自然を知覚していきます。

たとえそれがはじめて出会う自然であっても、直感的にあそびの中に取り込んで、分解し再構成して自分のものにしてしまいます。子どもは、実際に「みて・ふれて・やってみる」ことから、自然との関わり方や自分との関係性を理解しているのです。それらの積み重ねが、自分なりの「見方・考え方」の獲得へとつながっていくのではないのでしょうか。

このように、学生が過去の記憶や知識を頼りに表現するのに対して、子どもは好奇心と純粹さによって、目の前の自然と向き合い感じたことを全身であらわします。そのため、「いま」しかできない表現を楽しむことが可能なのでしょう。